

News Letter 第2号

2011年10月1日発行

発行人 本部長 主教 加藤博道

編集人 事務局長 司祭 中村 淳



いっしょに歩こう！
プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援

新地町特集



2011年8月28日の磯山聖ヨハネ教会主日礼拝後（於：斎藤研さんのアトリエ前）



地震前の磯山聖ヨハネ教会玄関前



地震前の祭壇

三兄弟姉妹の主にある平安を祈ります



スザンナ三宅よしみ姉、イサク三宅實兄、グレース中曽順子姉葬送告別式

震災から4ヵ月半が過ぎた7月22日に、相馬市の葬祭会館で250名の方が参列する中、大震災で逝去された磯山聖ヨハネ教会の信徒3名の葬送告別式が行なわれました。いっしょに歩こう!プロジェクト関係者を含む教会関係者35名も参列いたしました。

亡くなられた3名は、イサク三宅實兄・スザンナよしみ姉ご夫妻とその娘さんのグレース中曽順子姉で、以前東北教区の修養会や教会学校キャンプが盛んに行なわれた、海から50mほどのところにあった「ときわ旅館」(福島県相馬郡新地町埤木崎字磯山)にお住まいでした。實兄・よしみ姉ご夫妻は建物もろとも津波にさらわれたといわれ、また順子姉は勤務していた隣町の幼稚園で園児を津波から救い、力尽きて亡くられました。なお、加藤博道教区主教、中村淳司祭(いっしょに歩こう!プロジェクト副本部長)が礼拝の奉仕に加わり、聖公会の新地町に対する支援姿勢が表された象徴的な礼拝になったと感じています。3名の魂の主にある光明と平安をお祈りください。

磯山聖ヨハネ教会 管理牧師 司祭 ヤコブ 林 国秀



在りし日のときわ旅館

津波により、風呂場跡と土台だけの姿に…

磯山聖ヨハネ教会略史

教会住所：福島県相馬郡新地町埤木崎字埤浜

- 1920年(大正9年) この夏、当時の青葉女学院院長アンナ・L・ランソン女執事が、病後の保養のために磯山(現新地町)に来られた。その時に解放された日曜学校の働きが、磯山伝道の始まりであった。
- 1933年(昭和8年) ランソン女史が、婦人伝道師長山裕子と共に磯山に定住。
- 1936年(昭和11年) 礼拝堂兼会館(現建物)新築。磯山聖ヨハネ教会として聖別される。同時に仙台聖公会会籍であった56名が磯山聖ヨハネ教会の信徒となった。
- 1938年(昭和13年) ランソン女執事定年、帰米。後任にジャネット・ハーバード女史が着任。
- 1940年(昭和15年) 時局の悪化のため帰米。長山伝道師も辞職。宅間六郎司祭が定住して働かれる。この間、ランソン女史の働きにより、米国聖公会からの献金で埤浜地区に水門が設置されるなど、数多くの地元への働きがあった。

宅間司祭退職後、およそ50年間定任教役者がなく現在に至るが、教会員の手で守られ続けている。

磯山聖ヨハネ教会信徒 サムエル三宅信一兄 書簡

3月11日、マグニチュード9.0、震度6強という大地震は、続いて私たちの持っていた常識的な考えをはるかに超える巨大な津波をつくり、「水平線が黒い水の壁になって襲いかかってきたようだった」と友は話し、防波堤に激突して飛び散った水しぶきは防潮林の松の木を超える高さまで飛び上り、海岸近くにつくられていた県道は走っていたトラック共々押し流されてしまいました。

鉄道も港も例外ではなく、駅に停車していた電車はマツチ棒を指で折るような形で流され、築110年を越えて親しまれてきた新地駅もなくなり、線路は田んぼの中に無造作に敷きかえられました。

港内の安全を守るはずの防波堤はガレキと化し、波の力を弱める消波ブロックは陸に押し上げられ、さらに流され、転がされ、太いとも綱で係留されていたのだろうか、沖に出ようと、とも綱は解かれていたのだろうか、人気のない漁船は港から内陸深くまで流され、操舵室に人のいない船は、横になり縦になりして転覆。かろうじて漂っていた船も、泥土につかまり座礁。波が引いて置き去りにされた船は、三隻四隻と数えることが出来ました。

本来なら間もなく春作業に入ったであろう田んぼは、トラクターの音を聞くこともなく、広大な海水の湖となり、なお押し寄せる津波は2キロメートル程離れた国道を越えて家屋の残骸を運び、引く波もダム湖の堤防が崩壊したように一気に流れ出し、大きなうねりは一種の迫力を持ち、恐怖を覚える光景でした。波が去って残されたのは、大量の泥土とガレキ、廃棄物、自動車等が散乱する荒涼とした景色だけでした。今思えば、あつという間の出来事だったような気がします。

身につけていたものの以外はすべて流され、逃げる途中振り返ると、すぐ後を波が追ってきていたという状態でした。もし逃げるのが、ひとつ、ふたつ、みつっ……と20まで数える位の時間が遅れたらどうなっていたかと思うと、今もぞっとします。私たちは運よく逃げ切ることが出来ましたが、津波の破壊力はすさまじく、私たちの所も含め、海岸近くにあった二つの集落は200を越える家を流され、少しばかりの面影すらなくなる程、地面をえぐり取り、今の今まで生活をしていた息吹さえも消し去ってしまいました。私たちの所にある山に残された波の跡を見ると、津波の勢いは30メートルをゆうに超える高さまで襲ってきたと考えられます。

自然のもつ底知れぬ大きな力と、人間の持つおごりと稚拙さを、まざまざと見せつけられた思いでした。

この光景を目の当たりにし途方にくれましたが、それから2カ月を過ぎ避難所から仮設住宅に移り、気持ちに落ち着きを持てるようになりました。この間における皆様の励ましの言葉や背中を押してもらえ心強さもあり、また過分な御見舞、御協力、御支援まで頂き、ありがとうございます。生活も平常に戻りつつあり、前向きに物を見ることができるようになりました。

この度は本当にありがとうございます。

夏草の茂る候です。

皆様におかれましては、くれぐれも御自愛下さいませよう。

草草

追伸

日本聖公会東北教区の皆様には、度重なる慰問、訪問までいただき、本当に感謝しております。

※東北教区報「あけぼの」より転載

磯山聖ヨハネ教会のこれから

すでに皆さまご承知のとおり、3月11日の東日本大震災によって福島県新地町にある磯山聖ヨハネ教会は地震と大津波により甚大な被害受け、現在受聖餐者11名の小さな教会は、そのうち信徒3名の尊い命が津波によって奪われ信徒の全てが家を失いました。本来ならば春を迎える頃には、田畑では農作業が始まるのにそれも全くできませんでした。磯山の信徒の皆さんは毎年自分たちの田んぼで育てたおいしいお米を「磯山米」として

仙台基督教会で販売してその益金を教会への献金として捧げ、数年前には聖堂の改修費用として用いるなどしていましたが、塩分を含む湖のようにな

地震発生時刻で止まったままの磯山聖ヨハネ教会の時計

った田んぼがそれを阻んでいます。

そして大震災から2ヵ月を過ぎた5月中旬、ようやく避難所近くに仮設住宅が建築され、福田小学校に避難されていた信徒の皆さんを含む全員が入居し新たな生活が始まりましたが、ゼロからの出発となった生活のご苦労は大変なものとなりました。丁度そのころ日本聖公会いっしょに歩こうプロジェクトの働きが開始されて、全国からスタッフやボランティアが集結し始め、より一層厚い支援が開始されました。新地町の仮設住宅入居家庭はおよそ500世帯ですが、各家庭に1台ずつの掃除機やちゃぶ台の寄付、また、広畑仮設住宅の各家庭には靴箱用のカラーボックスが寄付されました。これらはすべて日本聖公会管区事務所に集められた東日本大震災緊急救援募金により賄われました。心から感謝いたします。

さて磯山聖ヨハネ教会は、しばらく主日礼拝を行なえずにいましたが、6月26日に仮設住宅にお住まいの信徒宅をお借りしてようやく礼拝を再開することができました。教会は依然として誰も住めない、堤防もない被災地の山の上にあり、さらにいまだ電気や水道復旧の目処もたっていない地域となっており、周りの復興計画を見つめながら教会の復興を見据えて行かなければならないという難しい状況にあります。教会はこの地域の信

徒を含む全ての皆さんと同じ状況で、本当に今の地で復興できるのか、あるいは、将来自分たちが移住を決断するとすれば、その地に共に教会も移転すべきか等、本当に難しい決断をしなければならぬ時がいずれやってこようとしています。

さらに、信じられないことに被災地域で空き巣や放火等の犯罪が多発し、形をとどめていた信徒の家が放火されるという事件が発生しました。誰もいなくなった山の上にある教会の危険も例外ではなく、教会内にある聖物の小さなものは運び出しましたが、歴史的価値を有するといわれるオルガン(1906年アメリカシカゴで製造)や祭壇、ステンドグラスといった大きなものの移動と修理保管が急務となり現在進めようとしています。また、現在、礼拝は

105年前に作られたリードオルガン

信徒の方々のご好意により提供された仮設住宅の4畳半の部屋で行なっていますが、10人も集まれば人が外にはみ出してしまう状態にあり、仮設礼拝堂を他所に建設するという方向で準備を進めています。



仮設住宅での礼拝

これまでのお祈りとご支援に感謝申し上げますとともに、どうかこれからも磯山聖ヨハネ教会と新地町の皆さんのためにさらなるお祈りとご支援をお願い申し上げます。

磯山聖ヨハネ教会 管理牧師
司祭 ヤコブ 林 国秀

新地町の被災、被害状況について

ー 現状は。そして、ここから共に ー

新地プログラム担当 ミカエル 松本 普

■はじめに■

人口8,172人の新地町では、この震災で100人が亡くなり、10人が行方不明になっています。外国籍の24人の方は全員無事でした。住宅被害については、右の表のような状況となりました。

磯山聖ヨハネ教会は、新地町ハザードマップで、災害時の緊急避難所指定を受けており、3月11日には20人程の近隣住民が避難し、救助されました。しかし、同教会関係者を含め4人の尊い生命が犠牲となってしまう、一方で、生存が確認された全員が住居を失い、仮設住宅での避難生活を余儀なくされています。

(7月31日現在)

	地震	津波
全壊	6棟	457棟
大規模半壊	8棟	33棟
半壊	38棟	38棟

■避難生活■

被災直後、福田小学校（体育館）などでの「集団別避難生活」から新地町広畑等の仮設住宅へ移り、「世帯別避難生活」を送ってられる被災者の方々は右の表の通りです。うち169世帯は「原発」近接地域からの避難者です。

仮設住宅名	世帯数 (人数)
小川公園仮設住宅 ①	48世帯
小川公園仮設住宅 ②	63世帯
※ ¹ 広畑仮設住宅	84世帯 (221人)
作田仮設住宅	46世帯 (118人)
小川北原仮設住宅	23世帯 (64人)
新林仮設住宅	58世帯 (148人)
前田仮設住宅	68世帯 (165人)
すずめ塚仮設住宅	57世帯 (156人)
がんご屋仮設住宅	126世帯 (331人)
計9カ所	573世帯 (1,496人)

※¹ 磯山聖ヨハネ教会の信徒さんは、親戚宅に避難している方を除いた全員が広畑仮設住宅に入居しています。

■具体的支援活動■

「いっしょに歩こう！プロジェクト・新地プログラム」では、初期初動の「緊急生活支援」（食糧、毛布、カイロ、冬物衣料等）

から、中・長期を見据えた「復興生活支援」の取り組みとして、以下のような要望に応える活動を行っています。

◆物資提供

- ・全仮設住宅世帯——食卓台、電気掃除機
- ・全仮設集会所——電気ポット、中型やかん、本箱
- ・広畑仮設住宅全世帯——カラーボックス、コーヒー、パン、セカンドハーベスト食品※²
- ・広畑仮設住宅集会所——食器棚、下駄箱、住宅地図

◆交流プログラム

- ・お茶会サロン
- ・イベント参加（新盆供養参列、新地町夏祭りブース出店、新地町復興計画策定委員会陪席他）
- ・高齢、独居世帯訪問
- ・連帯、連携型
 - 町役場、仮設住宅自治会、同女性部、ボランティアセンター、日本YWCA、生活相談員、社会福祉協議会、福田小学校PTAなど
- ・子どもタイム（広畑住宅集会所）

◆分かち合いプログラム

新地町の歴史と磯山聖ヨハネ教会の歩みを学習し、恵みを感謝し、困難を共に歩むために、被災地・被災者と参加ボランティアを繋ぐ活動。

※² 包装の印字ミスや箱の潰れなどの理由で、市場に流通させられない食品や、企業や行政が備蓄食品を新品に交換する際に出る旧備蓄食品等のこと。

新地町と歩む

プログラムディレクター
司祭 フランシス 長谷川 清純

東北教区対策本部から東北教区支援室、そして「いっしょに歩こう！プロジェクト」へと日々続けてきた新地町における活動は、当初の緊急物資配布支援から被災者支援へと移行し、被災され仮設住宅に入られたり、他所に避難されたりしたすべての方々への様々な生活支援を展開しています。それらの内容は前ページで松本さんが書いている通りですが、当初私たちはどこかで、信徒の犠牲者をみた新地町に対して特別な感情と格別な思い入れで接していたというのが正直なところでした。

しかしその一方で私たちは早くから町役場と連絡し合い、町を通しての聞き取りもして被災者のニーズにお応えするスタンスで関わらせていただいております。



広畑仮設住宅自治会・女性部との交流プログラム打ち合わせ

そんな中、大震災から2ヵ月を過ぎた5月18日、新地町役場2階に設置されていた災害対策本部で加藤憲郎新地町長と加藤博道教区主教の直接会談がなされました。同席したのは、磯山聖ヨハネ教会信徒3名と磯山聖ヨハネ教会管理牧師林国秀司祭、「いっしょに歩こう！プロジェクト」事務局長中村淳司祭と私でした。この会談で加藤町長が被災直後から今日までに繰り返されてきた、町民どうしの助け合う姿や各団体ボランティアらの奉仕する姿に感動されておられ、感謝とお礼が伝えられました。加藤教区主教は、教会の歴史を紐解きながら両者のこれまでの関係を大事に継承すべく、今後の町が進めていく復興また町の再建に対していっしょに歩ませていただきたい旨が表明され、固い握手が交わされました。



加藤町長との会談

新地町復興計画策定委員会はすでに7月13日と8月8日の2回開かれ、素案がまとめられつつあります。その素案によりますと、被災沿岸部に高さ6～7mの防潮堤を設置、防潮堤の内側に公園や遊水池を整備し、さらに西側にある現在のJR常磐線近辺に国道・県道をかさ上げして建設する構想が基本となっています。住宅や市街地はさらに内陸部に移設。津波で家屋が流失した地域は災害危険区域に指定し、水産業など一部の職種を除いて建築制限を設けます。津波で被災した家屋は485戸（8月8日現在）。被災者アンケートによりますと、住宅再建にあたり重視するポイント（重複回答）は69%が「高台」と回答、「現在の宅地」は44%、「海の近く」は6%でした。

第3回復興計画策定委員会は9月6日に開催され、私たちも委員会室にての傍聴をゆるされました。その復興構想を見ながらこれからの支援内容を検討することになりますし、磯山聖ヨハネ教会の再生も歩調を合わせていくことになるかと予想されます。復興計画は、12月までに策定される予定になっています。



福田学校の夏祭りに出店

新地プログラム担当スタッフ紹介



司祭 林 国秀
(東北教区)



松本 普
(中部教区)



加納 美津子
(東京教区)

プロジェクト事務局から

8月の活動（仙台圏ベース）

■名取市仮設住宅（箱塚桜団地）への支援

支援物資提供、動物小屋の提供（子供たちのため）、買い物バス運行（毎週木曜日）、自治会夏祭りへの



参加（輪投げゲーム・収益金は自治会へ寄付）等。

■石巻在宅被災者への支援

支援物資提供（フリーマーケット方式）、生活支援、生活相談等。毎週水・木曜日に訪問している。



■しょうがい者支援

仙台市、社会福祉法人「まどか」（知的しょうがい者通所作業所）の生産品である、まゆだま加工品の買取による支援を相談。



気仙沼市、社会福祉法人「洗心会」ひまわり（知的しょうがい者通所作業所）の生産品であるクッキーの買取支援を相談。上記2ヶ所



の施設はいずれも津波被害により施設を失い、仮施設、旧施設での再開を始めているが、大きな課題と困難を抱えているために支援。

■外国人支援

南三陸町志津川で毎週土曜日午後の「日本語読み書きクラス」の開講。同時刻に「こどもプログラ

ム」の開催。

8月中毎週月・水曜日、「一緒に夏休みの宿題やろうプログラム」開催。参加した子供の数は12人。計6回行った。



■新地町プログラム

週3回以上主に広畑仮設住宅、町役場等を訪問し、今後の支援プログラムの策定、教会生活の再建のための意見交換、復興会議の情報収集、等を行った。毎月第4主日での聖餐式が再開された（仮設住宅の一室にて）。

■支援物資の受入れ・整理

物資を河上ハウス（東北教区所有の民家、仙台聖フランシス教会隣）、ルーテル支援「となりびと」が借りている営業倉庫の一角に集約。

滝乃川学園、仙台の朝鮮学校よりの在庫物資を受入れ。



■青葉静修館、室根聖ナタナエル教会宿泊受入れ

関係学校の夏季ボランティアキャンプ・実習受入れを青葉静修館、室根聖ナタナエル教会で行った。計7校、延べ約140人。

青年委員会、各教区主催キャンプを受け入れた。

お知らせ

■8月11日釜石ベース「釜石支援センター」開設。開所礼拝をもって新拠点での活動がスタートした。場所は釜石駅から5分ほどの町の中心。旧楽器店の店舗兼住宅を借り上げて設置された。

【〒026-0031 岩手県釜石市鈴子町5-4 0193-55-4524】

■8月23日小名浜ベース「聖テモテボランティアセンター」開設。日立ボランティアセンターの後継拠点として小名浜聖テモテ教会内に設置。開所礼拝をもって活動開始。居京阪神3教区と北関東教区が運営。

スタッフコラム



北関東教区から、仙台オフィスに派遣されている執事バルナバ岸本望です。7月半ばの大変暑い時期から仙台に来させていた

たいておりますので、この号が皆様のお手元にある10月には、すっかり涼しくなり、3ヵ月が経とうとしている頃です。主にロジスティクス担当として、皆様から送っていただいた支援物資を、被災者のニーズに合わせながら、お届けする日々を送っています。週末には、栃木の教会に戻り、主日の御用を果たしながらの勤務となっています。

働かせていただいているうちに、私が実感したことを皆様に一つお伝えしたいと思います。

それは、このプロジェクトは、「特別な人がしている特別な働きではない」ということです。確かに東日本大震災は、私たちの世代にとって、特別大きな出来事です。しかし、人々と出会う中で、人生や生活の困難さに気づき、祈り支え合う関係に至ろうとするということは、聖書が示すイエス様のなさり方であり、普段の教会でも行っているはずのことです。それを今回は、より大規模に、より丁寧に行おうとしているのだと私は考えています。

被災者支援とは、徹頭徹尾被災者の目線に立つことであり、支援する側の思惑や都合を押し付けることではありません。大震災を機に、勢力拡大を目論む宗教団体や企業も被災地では見受けられますが、私たちはそうであってはならないと思います。先に各教会に届いたミッションステートメントをもう一度お目通しいただき、「いっしょに歩こう！」について思いを深め、ご協力いただければ幸いです。

皆様のご支援とお祈りを、心からお願い申し上げます。

(9月6日記)

■この夏、聖公会関係学校、神学校、各教区、管区委員会のボランティアキャンプ、実習が被災地において行われた。横浜教区、ウィリアムス神学館、立教池袋中学校・高等学校、聖公会神学院、神戸教区、神戸松蔭女子学院、日本聖公会青年委員会、香蘭女学校、プール学院大学、名古屋柳城短期大学、九州教区。(青葉静修館・室根利用団体、来所順) また、個人ボランティア参加者も多数来られた。

■仙台オフィスでは、個人でのボランティア活動希望者へは日本基督教団東北教区被災者支援センターエマオをご紹介します。エマオは基本的に個人でのボランティア参加者向けのプログラムを行っています。「いっしょに歩こう！プロジェクト」では釜石ベース、小名浜ベースで個人での参加が可能なプログラムを準備しています。ボランティア募集の情報をお待ちください。仙台圏ベースでも今後プログラムを設置する予定です。

【「エマオ」のHP <http://www.uccj.jp/>】

■現場では、夏が過ぎてからのボランティアワーカー不足が言われています。すべての働きにおいて働き手が足りなくなるのでは、と心配しています。「いっしょに歩こう！プロジェクト」のみならず、他団体でのお働きもご検討くださると幸いです。仙台オフィスでは日本基督教団東北教区エマオ、ルーテル教会救援「となりびと」と協働しています。

※第1号掲載記事の2カ所に誤りがありました。

お詫び申し上げます、訂正いたします。

①4ページ6月11日の記事

誤「145名」→ 正「174名」

②5ページ7月22日の記事

誤「南相馬市」→ 正「相馬市」

「いっしょに歩こう！プロジェクト」事務局

【open】月～金 10:00～17:00 【close】土・日・祝

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町3-4-5 クライスビル2F

TEL: 022-265-5221 FAX: 022-748-5321

E-mail: walk@nssk.org URL: <http://www.nssk.org/walk/>

